

時代の証言者

1966年（昭和41年）

はレコード・デビューと引き換えに金銭を求められるなど、先が見えない東京暮らしが続きました。すでに音楽学校は辞めていて、あてもなく歌手への足がかりを求めています。ある日新宿を歩いていたら、美人喫茶「バラード」という看板を掲げた店先で店員募集の貼り紙を見つけました。

美人喫茶とは、容姿端麗なウェイトレスをそろえ、高級感のある内装を売り物

女ごころを歌う 八代 亜紀 8

美人喫茶 銀座への道

にした喫茶店です。歌手手を募集していたわけではなかったのですが、中をのぞくとピアノがあり歌える雰囲気だったので、思い切った店に飛び込み、「ここで歌いたいの、オーディションしてください」と頼みました。

オーナーが出てきて、「いいですよ」と快諾してくれました。曲名は忘れてしまいましたが、ピアノの伴奏で歌いました。終わると、「すぐに専属になつてほしい」「いいんですか?」「ぜひ」と言われました。そして「率直に言って給料はいくらほしいですか」と聞か



上京して間もない頃に新宿で

れました。ほんの数か月前までバスガイドをやっていた月給が7000円でした。ここは東京だし7500円いや8000円にしておこうかな? 1万円なんて言ったら断られるだろうな、などと迷い、7500円という金額がど元まで出かかっていたんですが、「おまかせします」。するとオーナーは「わかりました、こちらで決めさせていただきます。月10万円でお願います」。自分

から言わなくて良かった。それにしても、東京ってすごい所だと、びっくりしました。

▲1966年当時、大卒国家公務員の初任給は約2万3000円。また厚生労働省の賃金構造基本統計調査では、調査の始まった68年の大卒初任給は約3万円だった。

出勤は昼ごろで、夕方まで。歌の合間には、ウェイトレスもやりました。レパトリーは、当時流行していたムード歌謡、ジャズにハワイアン。生活は安定し、実家にも仕送りができるようになりました。

17歳の頃、銀座のとあるクラブにスカウトされました。念願のクラブ歌手になったのです。あこがれのジ

ユリー・ロンドンのようにスポットライトを浴び皆が私の歌にき付けという思い描いていた世界とは少々違っていました。ひとつ階段を上がれたという気持ちでした。一方、歌っている時に、前をすーっと通ったホステスさんに、「あなたの歌、最低」と耳打ちされるなど、夜の世界の厳しい洗礼を受け、落ち込むこともありました。

それから間もなく、「エース」という、やはり銀座のクラブにスカウトされ、そこに落ち着くことになりました。月給は美人喫茶時代の倍になりました。そして、エースでの経験が、後の八代亜紀の糧となっていくのです。

（編集委員 西田浩）